

た な か み 山

号 行 具
第 7 桐 生 民
発 桐 生 民
ク ラ ブ

治山治水千年のつけ

禿山を緑に先駆者の足跡(下の二)

山 本 文 良



明治41年撮影 山々の白く見えるところが禿山(新免)

「上田上学区二千年の歴史」それを一口でいうと水との戦いです。

田畑の浸水や土砂流入。橋の破損や流失。家屋の浸水・流失・移転の繰り返しでした。それでも私たちの先祖は、文字通り七転八起。倒れても倒れても、また立ちあがって今日の基盤を築いて下さったのです。

台風は毎年のようにやって来ます。そして、大きな瓜^{うり}跡を今も残そうとしています。現代は学問が進み、台風のカヤツチ。住宅建築技術の向上。土木技術の発達により、被害は最小限に食い止められるようになりました。本当に有難い時代です。

しかし、この有難い時代は「ローマは一日にして成らず」の諺の通り江戸の昔から治山治水の必要性を叫び、黙々と失敗に失敗を重ねつつ研究を続けて下さった私たちの知らない多くの先駆者があったこと。さらに現場での難工事に危険をおかして従事して下さった地元の人たちが

おられたからこそです。

今日は、建設省近畿地方建設局琵琶湖工事事務所発行の「ふるさとの田上山を緑に」等を中心に、みなさんと共に先駆者の偉業を再認識し、感謝のまことを捧げたいと思います。

まず、天和三年(一六八三)淀川上流域の調査。土砂留の必要性・樹木伐採の禁止。砂防工事事務所の設置等に力を尽くして下さった河村瑞賢氏。

明治四・五年ごろ禿山の山腹工事の主工法「積苗工」を發明して下さった市川義方氏。

明治六年日本政府の要請によりオランダから来日。当時下流域の災害防止に重点が置かれていたにも拘わらず、上流地域の施工こそ第一だと力説。治水計画・設計・指導に当たって下さったヨハネス・デレーケ氏。

明治二十二年完成した桐生の「オランダ堰堤」(鍍ダム)は、デレーケの指導のもとに田辺義三郎氏が設計・監督したものです。百年たった今日でも厳然としてその機能を發揮しています。一方では、大津市の文化財指定を受けています。

禿山の最適樹「ヒメヤシヤブシ」を発見して下さった西川作平氏(天保十三年〜大正九年) さらに、「ヒメヤシヤブシ」別名

「ハゲシバリ」の播種培養に成功し普及して下さった滝池藤兵衛氏(天保十一年〜明治二十九年)

栗太郎長及び野洲郡長在任中。大戸川や野洲川流域等に郡林を設け、明治三十四年から大正九年の間に約五百五十六町歩に三百余万本の植樹をし郷土を守って下さった松田宗寿氏。

「田上の砂防さん」と地元民に親しまれ、田上山を中心に砂防工事の監督や技術者養成をして下さった井上清太郎氏(嘉永五年〜昭和十一年)。

最初の就職先が田上砂防工場であり生涯を砂防工事と治水事業に捧げ、後に「近代砂防の父」と仰がれた赤木正雄氏(明治二十年〜昭和四十七年)。

人は勿論、狐も通らない険しい山々での踏査研究。永年かかって漸く見つけた「ハゲシバリ」の木。喜んだのも束の間、公費培養による失敗に非難。さらに忍従の日々。「積苗工」が發明されても、地形をはじめ各種の条件が同一でないため定着まで二十三年。四年の歳月が流れていきます。これだけを見ても如何に困難な事業であったかが伺われます。田上山いや郷土が生きかえるためには、以上の方々のみならず陰の協力者があつたからこそです。

箭筈神社の歴史

御祭神「天児屋根命」とはどんな神様か(下)

宮司 井口盛彦

一口で言うとうと、天照大神もうつとりと聞きほれて、遂に天の岩戸を開けてしまったという美声の持ち主。

戸籍

●本籍地―高天原。●族―天神族。

●出生地―高天原

●寄留地―奈良県・春日大社、

大阪府・枚岡神社、大鳥

神社

京都府・大原野神社、吉

田神社

茨城県・鹿島神社

千葉県・香取神社

東京都・御岳神社、ほか

各地の春日神社

●職業―祭祀・事務長官

●妻―天美津玉照比売命

●実父―興台産靈神

天下一品の祝詞奏者

天児屋根命は、高天原で専ら祭祀

をつかさどる興台産靈神の子で、天

照大神の待臣として仕えていた。

命名の由来はよくわからない。

天美津玉照比売命を妻として、一

子をもうけたが名は知られていない。

神武天皇の東征に加わって働いた天

種子命は、この天児屋根命の孫である。また先にも述べたが、天照大神

が天の岩戸隠れをしたとき、八百萬

の神がみが天の安河原に集まって会

議をした結果、それぞれの役割を決

めた。天児屋根命は、非常な美声の

持ち主であったため、天の岩戸の前

で祝詞を奏する役を担当したのであ

る。のちに天孫瓊瓊杵尊の降臨に従い、

常に国政に参与して、国土経営に大き

く貢献したが、主な任務は祭祀(神

と人との中を取り持ち、仕える役)

をつかさどることであった。

後世の中臣氏(藤原氏の遠祖)の

祖神でもある。主な御神徳

天児屋根命は、国土安泰、産業(農

・商・工)繁栄の神であるが、家内

る所として、必要な時にお招きして

祭ったのを、何時も自分達と共に、

村の生活を守ってほしいという気持

ちから、お社を建て神様を祭ること

になったのです。

昔は農耕が生活の全てであって、

豊作、凶作を左右する自然の農耕守

護の神に豊作を祈ったわけです。

氏神祭は、氏子の生活を守る重要

な年中行事でありました。その祭祀

が祖先代々から今日に受けつがれて

いるのです。

我々と祖先との血のつながり、言

葉のつながり、心のつながりが日本

民族として、しつかり結びついてい

る。これから離れた自分は、日本民

宝の山

京都市名所 茂

田上山は、宝の山よ砂に寶石ピカ

ピカ”ものの例えに十年たてば一昔とい

う。それを基準にすると、昔、昔、

その昔の出来ごとである。

人の生活は、衣・食・住の順序で

進行していった。その第一歩でもあ

る衣の時代は曲りなりにも通り過ぎ、

食の時代に入ろうとしている頃の話

である。

我等自称「釣天狗」の釣キチ。河

童共は日曜日にくるのを待ち兼ね、

目の前にチラつく可愛い魚の姿を求

めては、近郷の川原に、池に、湖に

出かけて行った。

その副産物にゼンマイ・ワラビ・

フキノなどの山菜やカラス貝(ドブ貝)

が祖先代々から今日に受けつがれて

いるのです。

我々と祖先との血のつながり、言

葉のつながり、心のつながりが日本

民族として、しつかり結びついてい

る。これから離れた自分は、日本民

族でないという自覚が、天地の神々

の恵みと祖先の恩とに、厚い感謝の

念を捧げる気運にあらわされている

ものと思います。

釣キチ達が町角で顔を合はすと「次

の日曜日は、穴村の支那でヘラ鰯の

長寸会をやるう」「いや、吉川の鰯

の方がよい」「野洲川の木の浜のハ

スは今が一番大きい」など威勢のよ

い話声が賑やかに花を咲かす。

ある日。その場に居合わせた顧問

格の老人が「南郷の洗堰の下手に大

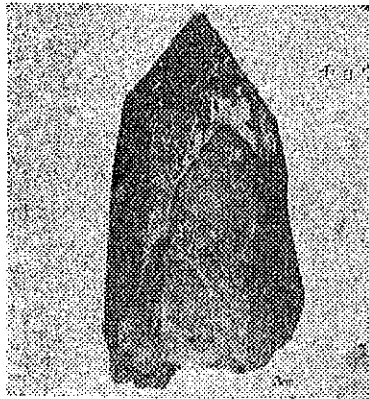
戸川という川が流れ込んでいる出合

いの砂を足の先でチョコチョコほじ

くってみる」と言う。「瀬田のシジ

ミ掘りか」「そんなケチなものやな

い」「ドブ貝か。あれは大きいから



田上山の水晶体

なあ」「ドブ貝はあんな砂地にはおらん。もつとよいものだ」「なんやねんおっさん。えらいもつたいぶつてるやんけ、何が出てくるねん」急に声が小さくなって「これは秘密やから他のもんと言いな」秘密厳守を誓うとやおら「実はな……この間ハイジャコを釣りながら足の爪先でチヨコチヨコほじくっているとキラキラ光るものが出てくるんや。つまんでみると透明な水晶やないか。もう釣りなんかどうでもよい。釣竿を土手にほりあげ宝探しに夢中になつてもうた。ホレこれ見い」と五、六個の小さなそれらしきものを見せる。中に緑色をしたものがある。「おっさん。これヒスイと違うか」「わてもそう思つて拾つてきたんや」宝石などお目にかかったことのない連中が目を丸くして、顧問の差出す寶石を拜んで一躍大金持ちになつたよう

な気分を味わつた。だから、次の日曜日誰一人の反対もなく大戸川の出合いへ宝探しに行くことが決つた。戦争中(昭和十四、五年頃)国鉄職員当時の仲間で、中野に住む中野君に案内をしてもらつて水晶掘りをしたことがあつた。その場所はいざれだつたか判別できないが、道端を少しはずれた丘に赤い小さな鳥居と祠がある所であつた。小さな無色透明の塊や紫水晶である。まわりは花崗岩の風化が進み、岩膚はぼろぼろになつて碎けている荒れた姿の丘だつた。大雨でも降ろうものなら砂は流れ、川底を浅くして水害を招く。後ろの山は、湖南アルプスとしてハイカーの目を楽しませてくれるが、田畑は砂をかぶり土手は決壊して村民を苦しめる。なぜ、こんな姿になつたのだらうと不思議な思いをしたものだが「たなかみ山」を読んでみて初めてその謎が解けた。

治山治水を忘れた古代人の千年のつけがこんな形で残つていたとは……。これは、何かの本に書いてあつたのだが、田上・信楽山系一帯は滋賀県下で唯一の鉱石(トパーズ・雲母・長石など)の宝庫であるということだ。

明治時代の先覚者がトパーズを拾い集め、当時の金額で二百八十四円

の大金をふところに入れた。今成金になつたその人は三日三晩、来る人を拒まずで呑めや歌えやのドンチャン騒ぎをやらかしたそうである。勿論田上の人である。

さて、話を元に戻して……我々は、大戸川の出合いで一日中。ここ掘れワンワン。そこ掘れワンワンと必死に川底を探し回つた。魚もさぞ驚いたことだらう。「ヒスイが沢山あつたぞ!」「これは原石やから艶がな

先人の知恵

苴織り機の変遷

ふれあい村資料館 山本三郎

●苴の用途

苴は、昔から使いみちが多く大変重宝がられてきました。

もう殆ど見られなくなりましたが、婚礼のお荷物が届くと、玄関に入つた土間に苴を敷きその上に置きました。お葬式になると、苴を二つ折りにしてその上に喪主側の女性が座つて「お悔み」を受けました。

何と言つても農家には、欠かすことのできない用具の一つです。数量の最も多く使用されたのは、穀物の乾燥(粃干し)用だつたと思います。苴を二つ折りにして両側を縫つて穀物を入れた吠や野菜の霜除け・日光除けなど。

また、古くから住宅用にも使われてきました。平安時代(七九四〜一九一)に考案された「寝殿造り」の床の上に敷かれたり、庶民の家の屋根裏にならべたり、出入口につるして内側が見えないようにしたのです。

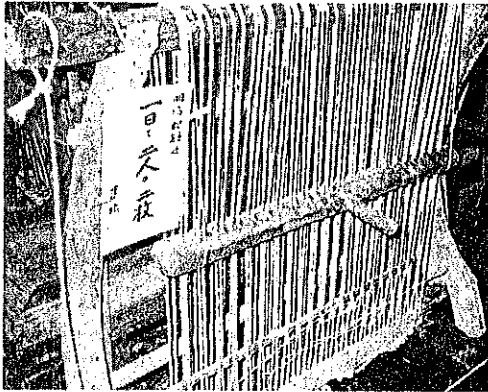
生活の知恵として災害予防時の土のう(砂袋)。どろどろにちやにちやの悪路の荷車や人の滑り止めとい

いるな方面に使われてきました。

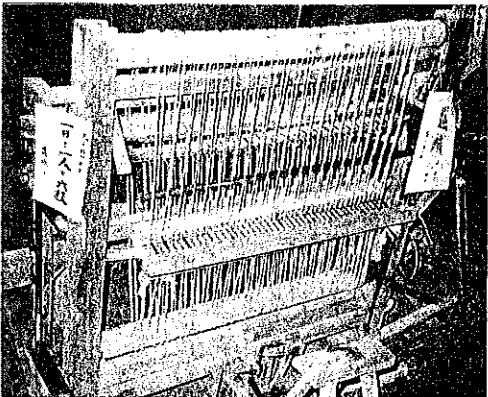
●ムシロという漢字

この字は、草冠の苴。竹冠の苴。さらに草冠に席の蓆の三種類あります。

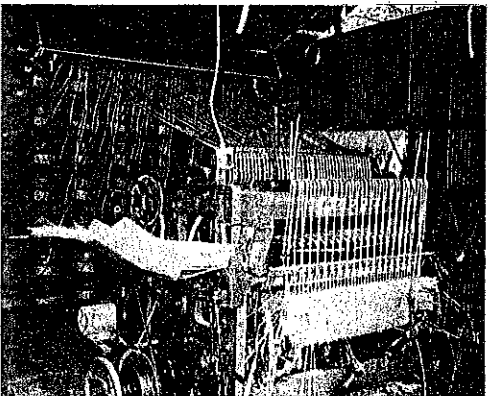
これはムシロの材料や用途や場所から漢字が作られたようです。草冠



明治初期までの苳織り機



大正から昭和初期までの苳織り機



現代の苳織り機

のムシロの材料はイ・ワラ・スゲ。竹冠のムシロは勿論竹です。草冠に席のムシロは、材料が草であることとお座敷で使うことからだと思います。

●苳織り機の変遷

上の写真の織機は、二人で一日に二〜三枚程度。竹製の櫛先に藁をさし当て、他の者は篋で藁を堅く詰めると上下に移動させる。この篋を交互に藁のさし加減を見て詰め織って行きます。

中段の織機は、土山の太野式といつて足踏み式が普及し、一人で一日に五枚から七枚ほど織れて実に能率的になりました。

下段の織機は、浅越式電自動苳織機といって一人一日に二十枚から二十枚織れます。

苳織りは、江戸時代から殆ど上段の型で、家用を各農家で織っていたそうです。なお安土・桃山時代(一五七三〜一六〇三)には、畳のようなものは庶民には高嶺の花でした。その代わり殆ど室内の床に苳を二枚重ねて生活していたようです。

中段の型は、大正から昭和初期まで専業農家で使われていました。下段の型は、日本に藁が少なく製造の殆どが中国に輸出されています。だが、この機械一台は生きがいの里ふれあい村に握えてあります。

●自然の力と先人の知恵
最近では文明が著しく進んで科学製品がどんどん使われるようになりましたので、苳も影を潜めてきました。苳に代わるビニールの敷物は、確かに幾つかの利点があります。しかし、

これに穀物を干したり入れたりすると汗をかいったり蒸さったりします。また、コンクリートの上に穀物入りの袋を置けば、小砂が袋の下に付着します。そのまま乾燥機に入れるとどうしてもご飯に砂が混って困ります。大自然が与えてくれた藁。それを加工した苳。そして太陽熱による穀物の乾燥は、手間はかかっても決して失敗はありません。

最近では、どんな農産物でも、形・色・味そして食べやすいものを選びます。先人の生活の知恵は、長い長い歴史があり研究の結果生まれてきたものです。時代おくれだと捨て去るものばかりではありません。私たちは、大自然の恵みを受け、さらに先人の知恵によって生きていることを忘れてはならないと思います。

最近では、どんな農産物でも、形・色・味そして食べやすいものを選びます。先人の生活の知恵は、長い長い歴史があり研究の結果生まれてきたものです。時代おくれだと捨て去るものばかりではありません。私たちは、大自然の恵みを受け、さらに先人の知恵によって生きていることを忘れてはならないと思います。

最近では、どんな農産物でも、形・色・味そして食べやすいものを選びます。先人の生活の知恵は、長い長い歴史があり研究の結果生まれてきたものです。時代おくれだと捨て去るものばかりではありません。私たちは、大自然の恵みを受け、さらに先人の知恵によって生きていることを忘れてはならないと思います。

金勝寺裏参道
大鳥居コースは表参道
だった (空)

山本文良

滋賀民俗学会発行の民俗文化31号の「湖南アルプスのハゲ山の成因は製鉄か3」の中に、金勝寺の古図では、いま上田上の大鳥居町が「大鳥原」と記され、ここが正面となっていると書かれていた。おやっと思ひ早速金勝寺里坊のご住職勝山圓誠師を訪ねた。④金勝寺寺領勝示絵図(鎌倉(延享元年)を拜見、ご説明により上記のことを確認することができた。

現在大鳥居からの参道は通行不能。④によると、金勝側から東・西並木金勝寺参道があったことも記され、今から約250年前に主要参道が変更されていたことがわかる。さらに、昭和に入るとこの道が改変修され参道・林道・ハイキングコースとなり、自動車の通行も可能となった。表参道も時代の要求を呑んで変わっていたのだった。

お礼

ご投稿、取材、資料ご提供本当にありがとうございました。心からお礼申し上げます。

桐生民具クラブ代表 山本文良
電話④〇〇七七 有線五六七八